

## 巻頭言

外国研究（foreign studies）を標榜する東京外国語大学にあって永らく独自の存在感を示してきた日本研究関係誌 2 誌が終刊を迎え、ここに新誌を発刊することとなった。

『東京外国語大学日本研究教育年報』は、『東京外国語大学特設日本学科年報』『東京外国語大学日本語学科年報』と誌名を改めつつも、本学学部・大学院における日本教育セクションの同窓会誌であると同時に、日本語学・日本語教育を中心として日本研究専攻の院生・教員が成果を発表する貴重な場であった。かたや『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』は『日本語学校論集』の時代以来、日本の留学生教育を先導する留学生予備教育機関の研究活動・教育活動の成果が掲載される日本語教育界の有力誌であった。私事ながら、私にとって『年報』と『論集』は院生の頃から最新号が出るたびに掲載論文を確認する雑誌の一つだった。

両誌の終刊は発刊主体の被った大きな変化による。2015 年に学内の日本関係教員を糾合する形で「国際日本学研究院」が設立。また、2019 年には既存 2 学部から日本語・日本地域セクションが分離、「国際日本学部」が設置される一方、留学生日本語教育センターの学内における位置づけが大きく変わり、独立の部局ではなくなった。この一連の動きの背後にあるのは長らく国立大学を取り巻く情勢への対応なのだが、結果として 2 誌の発刊主体たる教員集団が新組織に合流するとともに、詳細は省くが、既存 2 誌の編集を継続するだけの労力はもはや割けない状況に立ち至ったのである。どちらも 1970 年代以来の短くない歴史と実績を持った雑誌である。関係者の決断は容易ではなかった。方針の策定に尽力された研究活動推進部会の藤森弘子前部会長、菅長理恵委員をはじめ前期部会員の方々に改めて甚深の謝意を捧げたい。

新誌は両誌の後継誌という位置づけであり、それぞれの雑誌の目的と構成をある程度引き継ぐ予定である。とはいえ、新誌は発行主体の変化を反映して、おのずから旧 2 誌のどちらとも異なる新しい性格のものとなるであろう。今回の発行主体である国際日本学研究院は、予備教育から大学院教育までを一手に引き受けるおそらく国内未曾有の教員組織である。本誌が今後どのような雑誌に育っていくかは毎号掲載される論考の質次第であるが、既にその片鱗はこのプレ創刊号からも垣間見えるように思う。新雑誌の基本方針・投稿規定の作成から編集実務までを担当された研究活動推進部会村尾誠一現部会長をはじめ今期部会員の方々に改めて厚く御礼申し上げる。

願わくは本誌が旧 2 誌に勝る質を保ち、永くその実績を積み重ねゆかんことを。

2020 年（令和 2 年）1 月 20 日

東京外国語大学大学院国際日本学研究院長  
川村大